



文化遺産特別演習 報告書

第1号



巖島神社にて

北海学園大学人文学部



文化遺産特別演習 報告書

第1号

目次

令和元年度 文化遺産特別演習 報告	
引率教員 手塚 薫・仲丸 英起	12
広島研修～戦艦大和について～	
阿部祐稀菜	14
厳島神社はどのように守られているのか	
堀田 光志	16
文化遺産特別演習を通して感じたこと	
松平 純香	18
折り鶴は世界平和の夢を見るのか	
宮原 愛奈	20
大久野島の毒ガスはどこにいったのか	
吉岡さなみ	23
戦艦「大和」が現代を生きる私たちに与えたもの	
石崎 妃華	26
広島市を訪問して	
萩澤 雄大	28
広島に行き思ったこと・感じたこと、演習を振り返って	
澁谷 康晴	30
広島の世界遺産としての取り組み、その自然について	
清水理紗子	34
広島研修報告書	
宮島 睦貴	36
負の遺産から戦争の悲劇を見る	
菅原 繁	39



大久野島の夕焼け

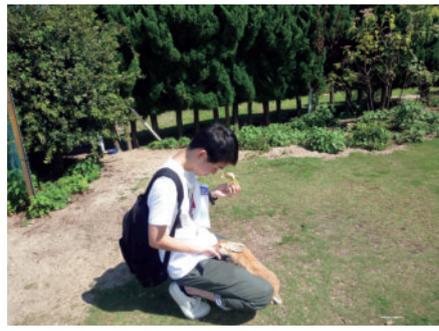


発電所跡から見た海岸

1・2日目
9月16・17日
大久野島巡見



大久野島の海



うさぎと戯れる



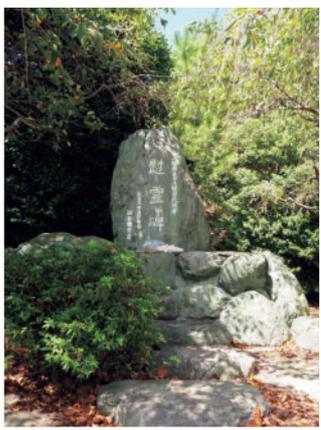
大久野島のうさぎたち



大久野島発電所跡



うさぎも暑さで
バテ気味



慰霊碑



研究室跡



第一棧橋



長浦毒物貯蔵庫跡



発電所跡



北部砲台跡

2・3日目
9月17・18日
呉市巡見



零戦62型



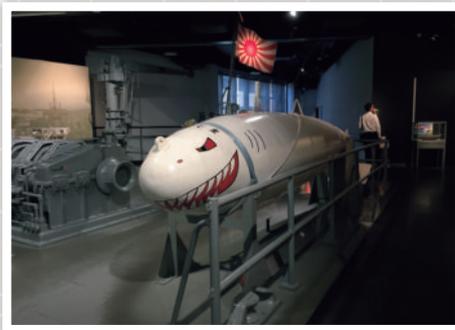
戦艦大和



潜水艦の操縦席



大和ミュージアム前にて



掃海艇ははじまのフロート



舵を握る



大和ミュージアム前で記念撮影



アレイからすこじまから見る潜水艦



てつのかじら館全景



アレイからすこじまに残されたクレーン



旧澤原家住宅



昭和町れんが倉庫群



大和ミュージアムを見学



大和ミュージアムを見学



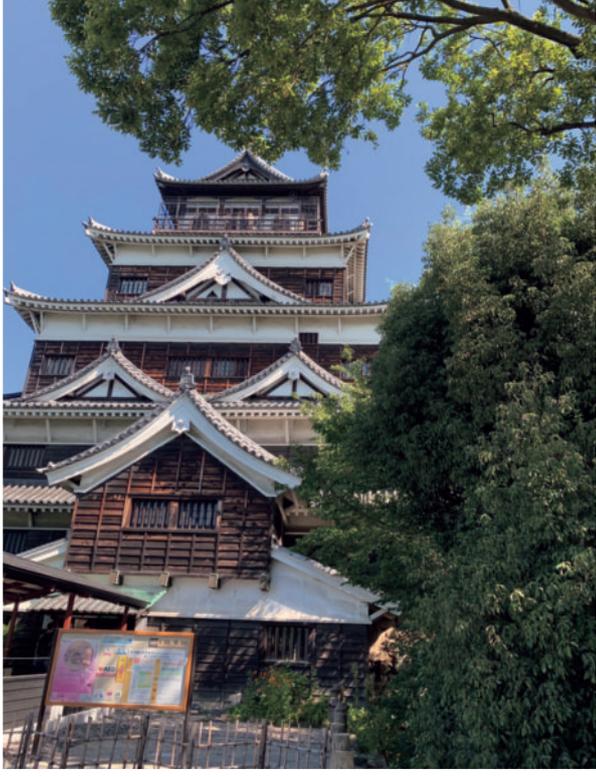
入船山記念館



歴史のみえる
丘にある
噫戦艦大和の塔



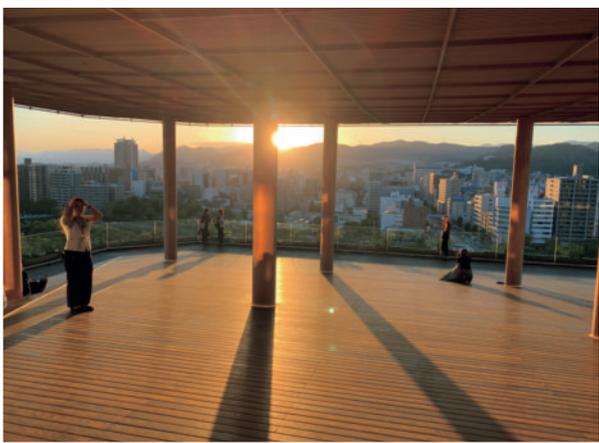
広島市巡見



広島城



広島城天守閣からの風景



折り鶴タワーから
見る夕陽



広島城



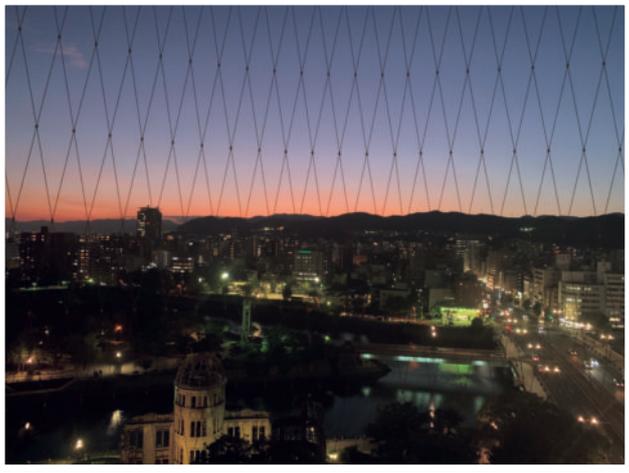
広島平和記念資料館で記念撮影



折り鶴タワーにて



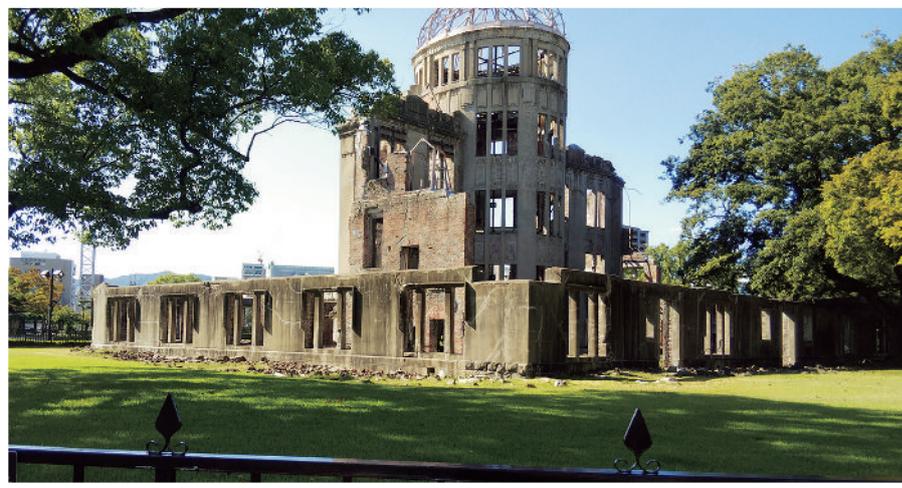
広島名物生牡蠣



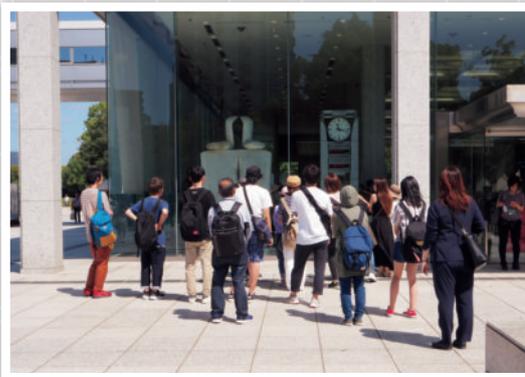
「ひろしまの丘」から眺める景色



原爆ドーム



原爆ドーム



地球平和監視時計前にて



被爆者であるガイドさんの話を聞く



平和記念公園



平和記念資料館で説明を受ける



宮島巡見



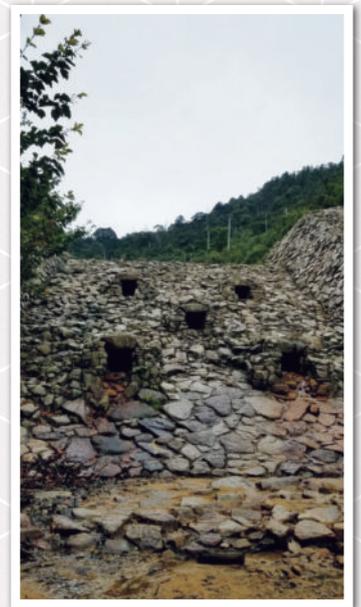
厳島神社



厳島神社で記念撮影



厳島神社にて



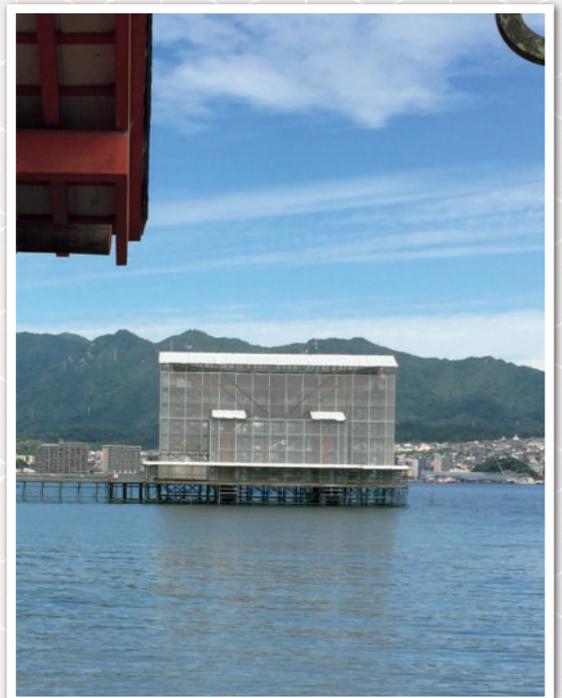
大聖院ルート途中にある砂防



雨天の山頂



再建された仁王門



工事中の厳島神社大鳥居



厳島神社遠景



厳島神社内にて



厳島弁財天



鹿と戯れる



大鳥居は改修中



弥山展望台から



豊国神社五重塔

5日目
9月20日
研究発表会



阿部さん・石崎さん



岩国観光ホテル内岩国四川飯店にて



岩国観光ホテル内岩国四川飯店にて



吉岡さん・宮原さん・松平さん



菅原さん・堀田さん・宮島さん



清水さん・澁谷さん



萩澤さん・小林さん



岩国城全景



錦帯橋で記念撮影



「みみずく」の手水鉢



「誰が袖」の手水鉢



岩国初代藩主吉川広家の墓



岩国城下町巡見



岩国徴古館



吉香 鶉の里



吉香公園入り口



橋を渡る



錦帯橋全景



構造について説明を受ける



香川家長屋門

令和元年度 文化遺産特別演習 報告

引率教員 手塚 薫・仲丸 英起

文化遺産特別演習は、日本にある文化遺産を実際に訪れることで、日本と世界との関係性を考える現地体験型アクティブ・ラーニング形式の特別演習として、本年度より開講されました。本年は「瀬戸内の環境・文化と戦争の歴史」をテーマに、広島・山口方面で実地研修を行いました。

今年度の演習では、4月から9月にかけて実施された5回の事前学習（いずれも土曜日に開講）をふまえ、9月16日（月）から9月21日（土）の5泊6日の日程でフィールドワークと研究発表を、帰札後の9月28日に事後学習を行いました。

参加者は、日本文化学科の1部1年生が5人、2年生が1人、2部1年生が2人、2年生が1人、3年生が1人、英米文化学科の1年生が2人の合計12人で、次の諸氏です。

阿部祐稀菜 堀田光志 松平純香 宮原愛奈 吉岡さなみ 石崎妃華
萩澤雄大 澁谷康晴 小林和広 清水理紗子 宮島睦貴 菅原繁

初年次で費用もやや割高だったこともあり、想定より若干少なめの参加者となりましたが、その分だけまとまりも良く、いずれの受講生も個人・グループでの調査に真剣に取り組んでいる様子がうかがえました。学生諸氏が自覚を持って行動してくれたお陰で、航空機の預け入れ荷物の到着地指定の誤りや、信号機トラブルによる列車の遅延などの他は目立ったトラブルもなく、無事に研修を終えることができました。

事前学習では、研修旅行に必要な諸連絡や事務手続きを行うと同時に、DVD「NHK スペシャル きのか雲の下で何が起きていたのか」（NHK エンタープライズ、2015年）と映画「この世界の片隅に」（片渕須直監督、2016年）を視聴し、その内容をレポートにまとめたり感想を述べあったりして、広島市・呉市の近現代史についての知見を深めました。さらに受講生が各自で研究課題を設定し、訪問する予定の場所について参考文献をもとに事前調査を行いました。

具体的な研修日程は、次の通りです。

- 第1日 移動（新千歳空港—羽田空港—広島空港—大久野島）
- 第2日 大久野島巡見・移動（大久野島—呉）
- 第3日 呉市巡見・移動（呉—広島）
- 第4日 広島市巡見
- 第5日 移動（広島—宮島）・宮島巡見・移動（宮島—岩国）・研究発表
- 第6日 岩国城下町巡見・移動（岩国—羽田空港—新千歳空港）

第2日は、現在では「うさぎの島」として知られている大久野島を視察しました。この島は戦時中に日本軍が毒ガスを製造していたことでも知られており、今も残る貯蔵庫や発電所などの遺構を見学し、大久野島毒ガス資料館で知識を深めました。

第3日は、9時から全員で大和ミュージアム（呉市海事歴史科学館）を訪れ、同館ボランティアガイドの方の案内で館内を見学しました。正午前からは自由行動とし、てつのかじら館（海上自衛隊呉史料館）・入船山記念館・アレイからすこじま公園・長迫公園（旧海軍墓地）・歴史の見える丘など、「この世界の片隅に」ゆかりの地を各自で視察しました。

第4日は、9時30分から広島城天守閣を見学した後、10時30分からは一般社団法人広島市観光ボランティアガイド協会所属ガイドの方に平和記念公園を案内していただきました。被爆者でもあるガイドの方は、ご自身の経験にもとづきながら、平和の大切さについて熱心にお話しして下さいました。昼休憩をはさみ、13時から引き続きガイドさんの案内で広島平和記念資料館を見学しました。14時30分以降は自由行動とし、おりづるタワーや被爆建物などを各自で視察しました。

第5日は、宮島に移動後の10時から、宮島公認ガイド連絡会所属ガイドの方の案内で、厳島神社や千疊閣などを見学しました。12時以降の自由行動中に、弘法大師空海が修行をしたとされる弥山へロープウェイで登った受講生も多かったようです。18時過ぎに岩国のホテルに到着後、これまでの調査を踏まえてグループごとに研究発表を行いました。短時間の発表でしたが、事前学習中に各自が設定した課題に誠実に取り組んでいる様子が伝わってきました。発表会終了後は、館内の「岩国四川飯店」にて夕食をとりました。

第6日は、9時から岩国観光ガイドボランティア協会所属ガイドの方に錦帯橋と吉香公園を案内していただきました。10時30分に自由行動となった後は、ほとんどの受講生がロープウェイで岩国城天守閣へ向かっていました。13時まで研修を終え、新千歳空港に定刻の18時35分無事に到着、長いようで短かった研修を終え、解散しました。

文化遺産特別演習は、「日本各地にある世界遺産の周辺で5泊6日の研修旅行を行い、「歩く、見る、聞く」学習を通して、日本文化とその世界的な意義についての理解を深める」ことを授業のテーマに掲げています。学生諸氏は、自らの問題関心にしたがって事前学習の中で課題を設定し、この「歩く、見る、聞く」という主体的な学びを通して得られた知見をレポートにまとめています。それぞれのレポートは、普段の大学の教室では得がたい知的発見に触れた喜びに満ちあふれています。人文学部の学生・教職員をはじめ、多くの方々にご高覧いただければ、幸いです。

最後になりましたが、ご多忙の中各地でガイドを務めていただいた皆さま、今回の研修旅行をコーディネートし、旅行中も添乗員として様々なご配慮をして下さった、日本旅行北海道札幌支店の鈴木すみれ氏に対し、厚く御礼申し上げます。

広島研修～戦艦大和について～

1 部日本文化学科 1 年 2719103 阿部 祐稀菜

1. はじめに

私がこの広島研修に参加した理由は日本の歴史について深く学ぶことができると思ったからです。私は戦争の歴史に興味があり、広島は世界で初めて核爆弾を落とされた場所であり、戦艦大和が作られた場所なので、うってつけの場所でした。

2. テーマ

「戦艦大和」

このテーマを選んだ理由は、戦艦大和についての私自身の知識が浅すぎたからです。原子爆弾についてはある程度思い浮かぶことはありますが、戦艦大和に対してはほとんど知らなかったからです。どちらも広島と深く関係していることなので、この知識の差を埋めるため戦艦大和を重点的に学習することにしました。

3. 戦艦大和について

I. 造船都市 呉

1853 年、ペリーが来たことがきっかけで海の防衛意識が高まることになりました。そこで 1871 年（明治 4 年）に神奈川県横須賀、広島県呉、長崎県佐世保、京都府舞鶴の 4 か所に鎮守府を設置しました。これが海軍の始まりと言われています。呉市は周りが山とたくさんの小さな島に囲まれており、海から見えにくく攻撃されにくいという点から造船が盛んな町へと成長していきました。

II. 戦艦大和は時代遅れだった？

1904 年から 1905 年にかけて発生した日露戦争では、戦艦が主流でした。この戦争で日本は攻略不可能と言われたバルチック艦隊に戦艦を使って勝利します。この出来事で「戦争は大砲で遠くにいる敵と撃ち合い、強いほうが勝ち」という考え方が一般的となり、戦艦大和もこの考えで作られました。しかし太平洋戦争の時期になると、飛行機が主流となっており、戦艦は時代遅れになっていたのです。

III. 戦艦大和を作る条件

① 仮想敵国アメリカに負けない戦艦

戦艦大和は最終兵器として作られました。日本は海戦を得意としていたためアメリカよりも強力な大砲を使えば良いと考えました。こうして当時世界一の技術を持つ戦艦大和が誕生しました。

② 極秘に作る

大和は極秘に作られ、船が完成したときに行う進水式は、呉市で大和を作った関係者のみで行われ、呉市民には防空練習を行うと伝え外出禁止命令を出していたので一般人にも知られることはありませんでした。また、元海軍大将、山本五十六が見せてほしいと頼んでも見せてもらえなかったほどでした。

③ 質を重視

当時、戦艦大和は「大和ホテル」とよばれるほど高度な技術が取り込まれていました。バルバスバウと呼ばれる戦艦大和の先端部分は波の抵抗を8%カットし、船の時速をあげる働きをしていました。また、大和に使われた技術は現在、私たちが日常的に使っている物にいかされています。10km先の新聞も読めたとされる深照灯は、太陽炉実験用の集光器に、大型スクリューは自動車製造に、目標までの距離を測る「15km測距儀」に使われた技術はカメラなどの精密光学機器に、飛行機を送り出すカタパルトは新幹線の台車部分にそれぞれ利用されています。

4. 終わりに

今回、私は広島に行ってみなければわからないことがあると感じる機会が多くありました。事前学習で本を読んだりインターネットで調べたりして知識を得ることはできますが、実際に現地に行って展示物や写真を見ることで当時の雰囲気を感じられ、現地の方のお話を聞いて事前学習では調べられない事実も知ることができました。ですが、一度現地に行っただけでは覚えられなかったこともたくさんあるので、また現地に行く機会があればさらに知識をつけて帰ってきたいと思います。今回このような機会を与えてくれた大学、両親に感謝しています。ありがとうございました。

[参考にしたもの]

大和ミュージアム内のビデオ『技術の結晶 船艦「大和」』

その他大和ミュージアムボランティアの方のお話から

厳島神社はどのように守られているのか

1 部日本文化学科 1 年 2719181 堀田 光志

1. 世界遺産の保護

今回の広島研修の中で、私たちは二つの世界遺産を訪れた。広島平和記念公園と、厳島神社である。

行ってみて実感できたのは、その性質の違いだった。同じ世界遺産といえども、やはりどの点が評価され、登録されたのかは全く違っていた。負の遺産としての側面が強い広島平和記念公園と、日本の文化や景観としての価値が強い厳島神社では、その雰囲気も、何もかもが違う。

遺産の保護、という点についても、広島平和記念公園と厳島神社では変わってくる。そして、厳島神社が平和記念公園よりも保護に力を入れなければならないのは明らかだ。厳島神社は木造建築であることに加え、海の上に建てられている。それに対し、平和記念公園は原爆ドーム等を除けば、ほぼ近代的な建物なのだ。

では、厳島神社は一体どのようにして保護されているのだろうか。

2. 景観の保護

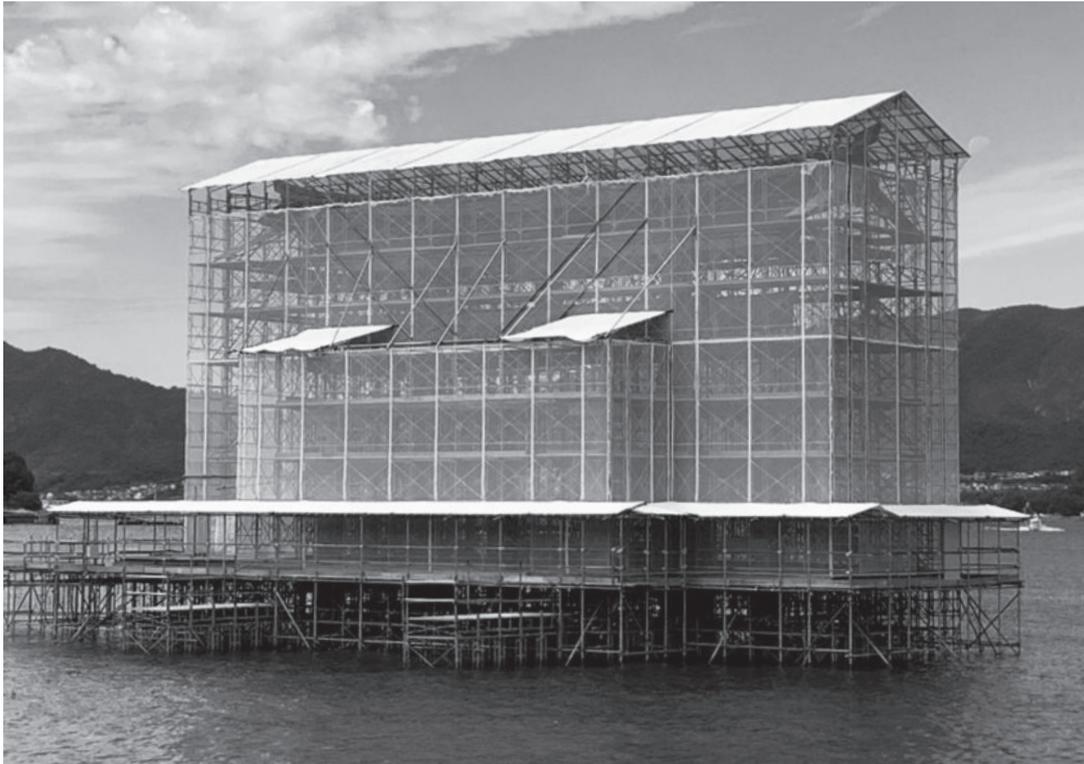
厳島神社と聞いてぱっと頭に浮かぶのは、きっと海の上に鳥居が建っている光景だろう。それほどまでに厳島神社のシンボルと化している鳥居は、残念ながら私たちが行った時には工事中で、見ることはできなかった。

しかし、私たちが特別運が悪いわけでは無いようだった。どうやら、一年中この神社はどこかしらを補修工事しているらしい。ということは、厳島神社は常にどこか壊れているということになる。果たしてそれはなぜなのだろうか。

私は不思議に思ったが、答えは簡単だった。厳島神社が、昔の建築方式と素材で保たれているからである。世界遺産登録の大前提である、遺産の真正性という概念を守るため、厳島神社には現代的な補強が全く行われていない。必然的に、その耐久性も低くならざるを得ないのである。だから、台風が来れば壊れるし、地震が来ても壊れるし、劣化も早い。厳島神社は常に修理し続けなければならない。

その不屈の修理こそが、厳島神社の真正性を守っているのだ。

しかし、守らなければならないのは建築様式と建物だけではない。その背後にそびえる、弥山もまた、世界遺産の一部なのだ。弥山の原始林は貴重な植物などを有している。それらを守るため、1957年には特別保護区に指定された。



工事中の鳥居

3. 伝統の継承

巖島神社で守られているのは、建物だけではない。神社における伝統や祭事、様々なものが現代まで伝えられている。特に目についたのは、巨大ないくつもの舞台だった。中でも能舞台は目立っていた。これらの舞台は現在でも、能や舞楽などの舞台に使われている。残念ながら祭事は見られなかったが、私が行った時は、結婚式が開かれてもいた。

巖島神社には太古から続く伝統行事の数々が、未だ残っているのだ。

4. 最後に

ここまでで述べたように、巖島神社には現代の技術が入り込んでいなかった。しかし、そのおかげで巖島神社は、かつての姿をそのまま保っている。もしもこれが現代技術の入り込んだ張りぼてであったなら、きっと本来の価値は失われていただろう。

今回の研修を通し、私は、巖島神社を守っているのは『伝統を重んじる精神だ』と感じた。真正性を残した建築、祭事、様々なものをここまで守ってきたのは、その心なのではないだろうか。

文化遺産特別演習を通して感じたこと

1 部日本文化学科 1 年 2719185 松平 純香

私が文化遺産特別演習に行くにあたり調査の対象としたのは、宮島の厳島神社である。厳島神社を調査対象にした理由としては、なぜ厳島神社は世界文化遺産に登録されているのか以前から疑問に思っていたからである。今回文化遺産特別演習の行程で厳島神社を回るということだったので、この授業を機に自分の目で見て、厳島神社が神秘的と言われる理由、またその空気感を感じたいと思った。

厳島神社の社伝によると、宮島に厳島神社が創建されたのは西暦 593 年。安芸国の豪族で、のちに神主家を世襲し権力を強めた佐伯鞍職が三女神から信託を受けて造ったとされている。また、神の島（宮島）を傷つけないよう陸地ではなく、浜に建築することを選んだとも言われている。

宮島の島名の由来は「島全体が神様」という考えからきている。つまり島全体を聖地と考えるため、血を流すことが禁止され、田を耕すことも禁止されている。そのため、お墓や産屋がなく、島で妊婦さんがいる場合、お産の時は宮島から船を出して本島に行って出産をすることになっている。

現在の厳島神社の造りは元来の社殿とは少し異なる。現在の社殿の多くは平安時代に作られたものである。神宿る島として崇拝されていた宮島に平清盛が初めて訪れ、厳島神社に参詣したのが 1160 年。その 7 年後、平清盛が太政大臣になる。当時平清盛は日宋貿易を推進していたため、海上交通の守護神がいる厳島神社を信仰した。そうして 1168 年から竜宮城を思わせる豪華かつ崇高な海上社殿に修造を始めた。社殿の多くは平安時代の貴族の住宅様式である寝殿造りで建てられており、今でも維持されている。

今回、私たちは厳島神社を 2 度回った。1 度目は午前 10 時半頃にガイドさんに案内して頂いた。この時は干潮で、社殿内にある卒塔婆石や鏡の池などがはっきりと見えた。私が境内の中で一番興味深かったのは、鏡の池である。鏡の池は、鏡とされている丸い円の中心から清水が湧き出ていて潮が引くと手鏡のように見えることからこう呼ばれている。つまり干潮時にしか見ることができないのである。鏡の部分はとても綺麗な丸で、自然にできたとは思えないほどだった。そしてこの綺麗な形が崩れることなく今でも残っている点に魅力を感じた。2 度目に訪れた時は満潮に近い時だったので、鏡の池を見ることはできなかった。鏡の池は、厳島八景の一つに選定されている。ガイドさん曰く、鏡の中に満月が入った時の光景はとても絶景だそう。満潮時の境内を歩くのは、海の中にある建物の中を歩いているようですごく不思議な感覚だった。

1 度目と 2 度目では社殿から見える景色が全く違って、もちろん卒塔婆石も鏡の池も 2 度目の時は見ることができない。同じ神社の中を歩いているのに違う感覚を楽しむことができる。神秘的で、言葉では伝えきれない魅力溢れる場所だと実感した。厳島神社は、「海上に立ち並ぶ建造物群と背後の自然とが一体となった景観が、人類の創造的才能を表す傑作であること」、「建造物の多くは 13 世紀に火災に見舞われたが、創建時の様式に忠実に再建され、平安時代、

鎌倉時代の建築様式を今に伝えていること」という点で世界文化遺産に登録されている。宮島全体で感じる神秘的な空気、干満の差を生かした芸術、文化が伝承され続けている建造物など、実際に訪れて見ないと厳島神社が世界文化遺産に登録されている理由を実感することはできなかったと思う。まだ訪れたことのない人には機会があれば是非訪れてみてほしい場所である。

ここからは、文化遺産特別演習で実際に行ってみて個人的に印象に残った所について述べたいと思う。まず、初日に行った大久野島。大久野島はとても自然豊かなところで、すごく居心地のいいところだった。今でも時々、初日に見た夕日、太陽の光を反射してキラキラ輝いている穏やかな海などたくさんの光景を思い出す。そんなのどかで心が落ち着く島だが、過去に島全体で毒ガスを製造していた時期がある。田畑や農家もあった平和な島、大久野島は明治時代中期の日清戦争の頃に10数台の砲台が築かれる。その砲台が当時実際に使用されることはなかったものの、これを機に大久野島が変わり始める。昭和時代になって、東京から離れていて情報が漏れることのない、尚且つもしものことがあっても危険性の少ない瀬戸内海に浮かぶ要塞、大久野島に毒ガス工場が設置されることとなるのだ。島にある毒ガス資料館に行くと、当時毒ガスを製造していた人たちが身につけていた服や防御マスク、毒ガス製造機、そしてみるに耐えない、被爆や感染症にかかった人の写真など、当時のことがよくわかる資料を数多く見た。私たちのグループは資料館には長く滞在し、多くの情報を得た。それとともに、どんどん資料館にいるのが息苦しくなった。資料館を出て散策をしている時、長閑で居心地のいいところだと感じる度に、資料館で知った大久野島の過去を思い出し、本当にやり切れない気持ちにもなった。穏やかな波の音を聴きながら、緑あふれる島を歩いていると、過去に使っていた毒ガス研究所や薬品庫、発電所など過去に起きていたことをしっかりと思い出させるものがある。過去と現在の現実を思い知る場所だと感じた。

次に紹介したいのが、私にとって一番印象深い、広島県にあるおりづるタワーである。おりづるタワーは世界遺産、原爆ドームの隣に位置する新しい観光名所である。コンセプトは「世界文化遺産と共存し得る建物」。13階の展望台スペース「ひろしまの丘」からは原爆ドーム、原子爆弾が落とされた爆心地を含めた広島の風景を眺めることができる。私はその日おりづるタワーに来る前に平和祈念資料館で太平洋戦争時に広島で起きたこと、当時の人々の生活などを自分の目で見たり、ガイドさんの言葉を聞いたりして、沢山のことを学んだ。平和祈念資料館でのガイドさんは戦争を体験した方だった。その人の言葉で「毎日勉強して、家族とご飯を食べて、友達と遊んで、好きな人とデートして……そんな当たり前と感じる毎日を当時の子どもたちは過ごせなかったんだよ」というのがすごく印象に残っている。戦争を体験した方の言葉だからこそ、説得力を感じた。その言葉を思い出し、今こうして自分が何事もなく、大切な人たちと時を過ごし、好きなことをする時間があって、日々を暮らせているということに尊さを感じた。おりづるタワーは普段意識して考えることのない日常のありがたさを思い返すきっかけとなる場であり、広島の過去と現在について考えることのできる空間。そして未来への想いが生まれる場所だと感じた。

今回の研修では多くのことを学び、感じ取り、考えさせられることが多かった。それは、実際に来てみないと経験することのできないものだった。私にとって考え方、ものの見方を広げることのできるいい研修になったと思う。次はどんなことを感じとるのか、何年後かに行ってみたいと思う。

折り鶴は世界平和の夢を見るのか

1 部日本文化学科 1 年 2719191 宮原 愛奈

昭和 20 年 8 月 6 日午前 8 時 15 分、広島市の上空では 3 秒間“第二の太陽”が光った。この太陽は、現存する島病院の真上で炸裂し一瞬のうちにこの世を地獄にしてしまった。こうして広島は世界最初の被曝地となったのである。

私は今回、原爆に曝された人々の様子と平和とは何かについて改めて考えるということに調査の焦点を当てた。あの戦火の中で生死を分けたものは何だったのか、平和のために私たちができることは何か。広島で考えてみようと思った。さらに目標としたのが“生きた証言”をこの目で見てくることだった。“生きた証言”とは戦争を体験された方のお話はもちろん、戦火に焼かれながらもその身を留めた物品や戦争を体験した方の描かれた絵など、私が五感で感じとったものと定義する。私の持つ戦争の知識は教科書や本のような紙面上やテレビなどのような画面越しで得てきたものが大半だった。そのどれもが戦争の惨禍を訴えるには十分すぎるほどであった。しかしその紙一枚、画面一面が私と戦争を切り離しているような感覚を幼い時から感じていた。長崎出身の母方の家族がいたこともあり、私は平和を訴えるものに敏感に反応するようになった。一人の日本人として、この目で戦争を知らなければならないと幼心に責任があった。そして、ついにその広島に足を踏み入れることとなった。

9 月 19 日、現地の広島は暑く、日光は背中や頭部に強く照り奇しくもあの夏を連想させた。私が訪れたのは原爆ドーム、平和記念公園、広島平和記念資料館、爆心地である島病院、袋町小学校平和資料館の五箇所である。どの場所もとても印象的であったが、投下直後の人々の様子は広島平和記念資料館に詳しいので、こちらの展示物を中心に昭和 20 年 8 月 6 日のタイムラインを遡る。

午前 7 時 09 分、中部軍管区司令部が警戒情報を発令する。この日の広島は快晴で視界は良好。警戒警報が 7 時 31 分に解除されると、市民は仕事に従事する。しかし、その後エノラ・ゲイ号が午前 8 時 15 分、悪夢の元凶を投下する。それは島病院の上空約 580 メートルで炸裂したと推定されている。投下から四五秒足らずで広島の街は灰燼に帰しこの世は地獄と化した。原爆による死者の数は現在も明らかではないが、日本原水協専門委員会『原水爆被害白書』（日本評論社、1961）の推算によればおよそ 15 万人から 17 万人近くが死亡したとされている。17 万人はだいたい苦小牧市の人口と同じくらいである。一体なぜこれほどまで多くの方が亡くならなければならないのか。平和記念公園でガイドを務めてくださった伊藤さんは、アメリカの原爆投下の理由をこう位置付けた。「お金と時間をかけたもののテストだ」と。

そもそも原爆はアメリカやイギリスよりも先にドイツが研究を先行していた。それを知ったアメリカやイギリスはドイツに核兵器を使わせないためにも核兵器の開発に着手した。これが核兵器がなくなる要因である、いわゆる「抑止論」である。しかし、先行研究を進めていたドイツの戦況は崩壊寸前になるまで追いつめられる。イギリスが核兵器の研究にそこまで費

用を割いていなかった一方、アメリカは開発に多額の費用を投資していた。この開発費用は国民の税金から賄っていた上に、原子爆弾の開発は極秘プロジェクトであった。もし原子爆弾を使わなければ、お金と時間は徒労となり、巨額の開発費用の説明責任も生ずる。そこで原子爆弾を投下したのである。アメリカ側は「戦争の終結を早めて米兵の命を救った」や「真珠湾攻撃の復讐だ」などと国民に向けて主張した。

しかし、テストの結果は人類史上類を見ない非人道的なものであった。わずか三秒ほどの熱線の持つエネルギーによって爆心地の地表の表面温度は摂氏 3000 から 4000 度に達したと考えられている。水を求める声が町中に溢れ、川に飛び込んだまま息絶える人も大勢いた。温度に加えて圧力も絶大なものであった。ガイドの方のお話によれば、1 平方メートル（畳のおよそ半畳分くらい）に 11 トンのトラックが落下するのと同じだけの圧力がかかったようである。爆心地付近の人々はほぼ即死。建物もほぼ全壊。生活の痕跡は残さず焼き尽くされた。さらに人々を苦しめる要素はいくつもあった。爆風、熱線、衝撃波、火球、異臭、倒壊した建物の破片や、建物の下敷きになるリスク、目に見えないうちに浴びて蓄積された放射能などである。外傷だけでなく、家族や友人など身近な人と離れ離れになったり、人間の世とは思えないほどの光景も目撃し、ヒロシマの人々に対して精神的にも消えることのない爪痕を原子爆弾は残したのである。

では、被爆者の身には具体的にはどんなことが起こっていたのか。原子爆弾投下直後のヒロシマの様子から振り返る。広島平和記念資料館の資料によると、頭髮は焼けちぎれ、顔、腕、足、背中 of いたるところに火ぶくれができては破れ、皮膚が垂れ下がったという例。「熱い」と言うので服を脱がせようとしても、服と皮膚がくっついて脱がせられないという例もあり、これはそのときに鉄で切って脱がせたという服が資料館に展示されていた。所々が破けていて生々しく、まさに生きた証言がそこに佇んでいた。全身が熱線で焼け、性別もわからないほどであり、わずかに遺された私物から身元が判明したという例もあった。こちらも資料館に展示されていて、生々しく負の歴史を語っていた。遺品には表れない、内部から人々を侵食する、放射能による神経症様の症状も後に見られた。広島市・長崎市原爆災害誌編集委員会編『原爆災害ヒロシマ・ナガサキ』（岩波書店、2005）によると、この症状は全身に倦怠感があり、手足がだるく、健康な人の 5、6 倍は仕事を休む。1 日仕事をすると、2、3 日は休まねばならぬという状態である。あるいは記憶力が著しく低下し、根気もなく仕事の能率が悪いようである。これは原爆症状の一種なので配慮されて然るべきである。しかし、熱傷等とは異なり目に見えない透明な被害の領域であるために、原爆症状に無理解な人々はこうした人を「ぶらぶら病」と揶揄した。このように、あの地獄を生き抜いても、周りの偏見や好奇の目に苦しむ被爆者がたくさん存在した。

上記の他にもたくさんの資料を目にした私は、どうすれば平和を創出できるのかを改めて考えてみた。ここでいう平和とは、戦争がなく、すべての人が差別や偏見に苦しまず衣食住に恵まれた核兵器のない世の中を指す。しかし、これは世界の現状においてはかなりの希望論である。ではそもそもなぜ、平和の実現は難しいのか。この疑問を解くカギは、愛国心にありそうだった。国民の安全を確保するためには、兵力や防衛設備が必要である。自国の平和を思う愛

国心があるからこそ軍備を整え、増強する。ところが、軍備を整えるということは侵略に行使できる力も当然大きくなる。これは他国から見れば脅威になり、周辺国に緊張感を与える。緊張感を覚えた国は万が一に備え、国の防衛を考え始めるだろう。これがエスカレートし、様々な国に広がっていったのが現状を作った一因とも言えるのではないだろうか。しかし、防衛自体は決して悪いことではない。問題は、国同士の信頼関係が出来上がっていないことである。軍を増強しても、それが自分たちに向けられることはない、という確固とした信頼関係が双方ないし各国があればプレッシャーは感じないはずである。世界平和のためには国同士の不信感を除去し、お互いの信頼関係を築いていくことが肝要なのである。具体的には、国連の平和維持活動などを各国が協力して行ったりすることが効果的だと感じた。平和活動が推進され、国同士の信頼も育める大きな可能性を秘めているためである。しかし、これを実現するには時間や人員、費用や各国の同意などが必要とされるために、これらを確保する手段について引き続き考えを広げていきたい。

今回、広島に赴いたことで平和への希求が自分でも増したように感じた。ここに紹介しきれないほどたくさんの生きた証言を目撃し、そのすべてに筆舌に尽くしがたい想いを持った。この証言を遺した人々はどんな思いを持って生きていたのだろうか。遺された人々はどんな思いで生きてきて、どんな思いでこの資料館に遺品を寄贈してくださったのか。そんなことを考えずにはいられなかった。また、広島や長崎といった被爆地とそれ以外の地域での平和教育の質の差異の発見も、現地を訪れることでしか得られない収穫だったように思う。広島の子供たちは焼け焦げて真っ黒な三輪車を見て、すぐに「しんちゃんの三輪車だ」と言って、しんちゃんの話 시작했다。自分の友達の話でもするようにしんちゃんの話 시작했다子供たちの間には、戦争と彼らの生活が切り離されていないように思えた。「昔のこと」「誰かの身に起こったこと」ではなく、一人の被爆者の人生に寄り添い、向き合う。こうした受け止め方を幼い子どもでもできているのは、被爆地特有の平和教育の質の高さにあると感じた。資料館の3階から平和記念公園を見下ろすと、緑と青の組み合わせが、まるで地球のようだと思った。平和記念公園はどこまでものどかで、どこまでも清らかである。この平和記念公園がこの地球の縮図になる、そんな世界を創りあげたいと思いながら折り鶴を一羽、飛び立たせた。

大久野島の毒ガスはどこにいったのか

1 部日本文化学科 1 年 2719201 吉岡 さなみ

1. はじめに

私が今回のレポートの題材に選んだのは、中国における毒ガスの使用例と、残留化学兵器の問題についてである。最初は、島の発展について調べようと考えていた。しかし、大久野島の毒ガス資料館で中国の残留化学兵器の展示を見ていく中で、毒ガス問題は過去のものではないと知り、現代に通ずる問題として調べることにした。

次の章からは、まず大久野島について述べる。そして、戦時中にどのように毒ガスが使われたか、また、具体例として 1942 年に起こった北垣^{ヘイタン}事件を取り上げたいと思う。そして、戦後の残留化学兵器の問題についても取り上げたいので、まとめに入る。

2. 大久野島について

大久野島は瀬戸内海に浮かぶ島々の 1 つであり、現在は国民休暇村になっている。

しかし、この島は 1929 年から終戦までの間、「陸軍造兵廠火工廠忠海兵器製作所」として、様々な毒ガスを製造していた。

表 1 大久野島で生産されていた毒ガスの種類及び量

日本軍での呼称	毒ガス名	性質	具体的症状	製造量
黄	イペリット ルイサイト	糜爛性	水疱・ 呼吸器障害	2805t・ 1268t
赤	ジフェニールシアンル シアン	くしゃみ性	酸素吸入機能のマヒ	1757t
茶	青酸ガス	窒息性	窒息	248t
緑	塩化アセトフェノン	催涙性	肺水腫	28t

製造量は実際にはもっと多かったと推察されている。

3. 日本軍による毒ガス使用

日本軍が戦争中に初めて毒ガスを使ったのは、1930 年に台湾で起こった霧社^{むしや}事件の時である。霧社は山奥にあり、台湾が日本に割譲される前からタイヤル族と呼ばれる人々が住んでいた。その後日本人が入植していく中で、タイヤル族は過酷な労働に駆り立てられていく。そして 1930 年 10 月 27 日、彼らは暴動を起こし、山中でゲリラ的な戦いを続けたが、日本軍が飛行機より投下した催涙ガスなどにより、戦闘不能になり投降した。この事件を皮切りに、様々な局面で日本軍は毒ガスを使用していくのだが、証拠がほぼないことも多い。理由はいくつか

存在し、第1に終戦時に使用許可証や報告書が焼却処分されてしまったこと。次に、元日本軍の人々の証言が中々集まりにくいこと、そして、毒ガス被害で亡くなってしまった人が多いことが挙げられる。

上記の事例は台湾であったが、中国本土では山西省一帯での使用が一番多かった。理由として山西省一帯は内陸山間部であり、諸外国に毒ガス使用の事実が漏れにくいことが挙げられる。日本は1925年にジュネーブ議定書に調印しており、毒ガス使用はできないことになっていたからである。実際は、1938年に参謀本部より北支那方面軍へ山西省一帯における「あか剤」の使用許可が下り、1939年には「きい剤」の山西省一帯での実験的使用が許可されていた。

被害者数が多い事件として、北垣事件を取り上げたいと思う。1942年5月27・28日に河北省定南県北垣村で起こった事件である。河北省を東西南北に分けたうちの中央部である冀中の共産党軍及び支援する民衆のせん滅を狙った作戦の一環として行われた。太平洋戦争開戦後の日本は、冀中を兵站基地に変える必要があり、その作戦中に北垣村に中国側の正規軍である八路軍約1000人が侵入するとの情報を手に入れ、討伐へ向かった。27日の午前4時から戦闘が開始されたが、じきに中国側が劣勢となり、地下道へ避難した。その為、日本軍は地下道の出入り口を封鎖したうえで「あか」を流し込み、虐殺した。

この事件のように、多くの戦闘では「あか」が使われており、「きい」の使用に関する証言はあまりない。やはり、「きい」は殺傷力が高すぎるために、日本軍側でも明確に毒ガスと認識されていたようである。逆に「あか」はくしゃみが主な症状であるため、催涙弾感覚で使っていたという証言が、元日本軍の人々から出てきている。

4. 終戦後の毒ガス被害

終戦後も遺棄された毒ガスにより、様々な被害が出た。以下にいくつかの被害を挙げる。

- 1974年 黒竜江省ジャムス市 浚渫船 糜爛性ガス弾により、乗組員ら35人が被毒
- 1982年 黒竜江省牡丹江市 下水道工事 糜爛性ガス弾 作業員4人が被毒
- 1987年 黒竜江省チチハル市 ガス管工事 糜爛性ガスのドラム缶 200人以上が被毒

また、戦後、人民解放軍が東北部各地から^{ハルバリン}ハルバリンという小さな村に遺棄毒ガスを集め埋設した際には、「10発の通常砲弾を埋め忘れたとしても、1発たりとも化学砲弾を埋め忘れてはならない」という強い指示を出したという。それほど、毒ガスは中国で使われたという事実を窺い知れる一言である。

日本でも全国各地に毒ガスは遺棄されており、様々な種類のものが見つかっている。

- 1995年2月 広島市 ヒ素化合物 環境基準の350倍の濃度で検出
- 1996年 北海道屈斜路湖 イペリット・ルイサイト混合弾26発が発見される
- 1997年 大久野島 北部海岸 赤筒発見 環境濃度の36倍のヒ素が検出される

このように、遺棄毒ガス問題は終戦後の今も大きな問題として存在している。

5. おわりに

今回私が毒ガスについて調べていく上で考えたのは、戦争の終わりとは何かという事である。戦闘自体が終了し講和条約を結んだとしても、今回のように負の遺産とも言うべき物が被害をもたらしているのならば、戦争が終わったと言えるのだろうか。過去に起こったことだとしても、それは責任を取らなくてもいい理由にはならない。これから必要なのは、早急に遺棄されたすべての毒ガスを処分する事であり、処分が終了して初めて戦争は終わるのではないかと考えた。

[参考文献]

尾崎祈美子『悪夢の遺産 毒ガス戦の果てに一ヒロシマ・台湾・中国』学陽書房、1997年
石切山英彰『日本軍毒ガス作戦の村—中国河北省・北垣村で起こったこと』高文研、2003年
栗屋憲太郎『中国山西省における日本軍の毒ガス戦』大月書店、2002年

戦艦「大和」が現代を生きる私たちに与えたもの

1 部英米文化学科 1 年 2919107 石崎 妃華

広島県呉市にある呉市海軍歴史科学館（愛称：大和ミュージアム）の、平成 17 年度以降平成 30 年度までの累計来館者数は 1,300 万人を超えており、平成 30 年度に行われたアンケートによると、93.9 パーセントの来館者が「満足いただけましたか？」の質問に対して「はい」と回答している。

大和ミュージアムには、戦艦「大和」の 10 分の 1 の大きさの模型が展示されている。約 2 億 1000 万円の費用をかけてつくられた戦艦「大和」の模型は、本物の戦艦「大和」に設置されていた大砲や船首も精巧に再現されている。愛称にもなっているように、この模型が大和ミュージアムにおける最も大きな展示物である。

では戦艦「大和」の価値と現代に与える影響は何だろう。これらの点について事前学習、現地、事後学習を通して学んだことをまとめ、見てゆく。

戦艦「大和」は、昭和 16 年 12 月に呉海軍工廠で造られた世界最大の戦艦である。この「大和」という名称は、現在の奈良県の旧国名、また日本の古称に因んでつけられたものである。大和の造船計画は当時極秘裏に進められ、進水式も機密保持のために公表されることはなかった。連合艦隊司令長官である山本五十六は建造途中の大和を見ることができなかった。また、建造ドックの上には大和を目隠しするために屋根が設置された。

機密であった大和は、現在の価値で約 4,000 億円の費用をかけて建造され、世界最大で最高の設備があったと言われている。

はじめに、大和は軍艦の大砲として世界最大である 46 センチメートル 3 連装主砲を前に 2 基、後ろに 1 基、計 3 基 9 門、15.5 センチメートル 3 連装副砲 4 基計 12 門と、12.7 センチメートル連装高角砲 6 基、25 ミリメートル 3 連装機銃 8 基、13 ミリメートル連装機銃 2 基を装備していた。3 連装の大砲は左右が砲撃してから 0.5 秒後に中央が砲撃することで、砲撃対象に当たるまでに砲弾同士が当たらない仕組みになっている。これらの装備により、大和は最重武装の戦艦となり、40 センチメートルの装甲によって計算上は不沈艦となっていた。

次に、医療設備の充実した大和は病院船としての役割も担っていた。手術室につながる通路には押ボタン式自動開閉の鉄扉が設置されており、無影灯が備えられていた。また各種臨床検査室、病理検査室、レントゲン室、病室があった。これらは当時の平均水準を上回る医療を実施しうる設備であった。医療設備の点からも大和は世界一を誇るものだろうと推測されている。

さらに、大和には現代に通ずる科学技術を用いた設備が豊富にあった。

大和の艦首は、球状艦首（バルバス・バウ）を用いることで船の造波抵抗を約 8 パーセント

削減することを可能にした。それにより、馬力出力や排水量をおよそ大型駆逐艦一隻に匹敵するほど節約した。この技術は現在の漁船タンカーの船首に用いられている。

また、弾薬の誘爆を防ぐために艦内の温度を約 27 度に保っていたが、使われていた冷却装置は士官室の冷房としても利用されることがあった。この弱電技術は冷蔵庫などの家電の技術に大きな進歩をもたらした。

それから、大和の全ての乗組員の寝台としてベッドが設置された。船は海の上で揺れたり傾いたりすることが多いために、重力を利用して落ちることの少ないハンモックが置かれていたが、技術の進歩により揺れや傾きが軽減され、ベッドを置くことができるようになった。

他の戦艦と比べると冷房とベッドという居住性の高さから大和は「大和ホテル」と呼称されることもあったという。

攻撃する対象を正確に捉えるために用いられた 15 メートル測距儀は、世界一の性能を誇っており、精密光学機器産業の主にカメラの技術開発に大きく貢献した。

航空機を発射するために設置された 2 基のカタパルトの技術は、現在の新幹線の車輪と台車に、利用されている。

大和の主砲を回転させるための技術は、ホテルニューオータニの回転型展望レストラン「The SKY」で利用されている。このレストランは 1964 年東京オリンピック開催に合わせて開業した。この回転技術により、テーブルに置かれたコップの水を一滴も零すことなく 360 度見回すことができる。

さらに 2011 年には、大和の探照灯反射鏡の予備を集光器として利用して新燃料電池に使用するマグネシウムの再利用施設が公開された。集光器は太陽光を太陽炉で集光する事でおおよそ 3600 度もの熱を作り出すことができる。

戦艦「大和」は世界最大ではあるが、当時の戦争はすでに空中での戦いに移行していて、大和に大きな活躍の場はなかった。しかし大和に搭載された多くの技術は戦後の科学技術の発展に役立っている。

つまり戦艦「大和」は現代を生きる私たちに、科学という大きな価値と、その進歩という影響を与えたと考えられるだろう。

[参考文献、URL、解説]

- ・ 祖父江逸郎『軍医が見た戦艦大和 一期一会の奇跡』角川書店、2013 年。
- ・ 大和ミュージアム (<https://yamato-museum.com>、2019 年 10 月 20 日アクセス)
- ・ 大和ミュージアムボランティアガイドの解説。

広島市を訪問して

1 部英米文化学科 1 年 2919175 萩澤 雄大

はじめに

私は、5泊6日の広島研修旅行にいった。前々から、世界遺産に興味があり、この授業を通して深く学んでみたいと思い参加することに決めた。実は、広島には、修学旅行でも行ったことがあり、この授業でも広島に行くとき、再び訪れてもっと自由に学ぶことができると思い、楽しみにしていた。実際に行ってみると、訪問地全てが、予想以上の人で、外国人の観光客もおおく、やはり遠くからでも来る価値のある場所なのだと、確認させられた。私が今回特に印象に残った、広島市の平和記念公園について感じたこと、学んだこと、研修後調べたことなどを中心に述べていきたい。

平和記念公園について

平和記念公園は、「顕著な普遍的価値をもつ出来事もしくは生きた伝統、または思想、信仰、芸術的・文学的所産と、直接または、実質的関連のあるもの」が登録基準となり、世界遺産に登録されている。日本で唯一、負の遺産である。行ってみると、小学生の団体がとても多く、驚いた。資料館の中は、高校2年生の時に来た時から、リニューアルされており、絵で表現されている原爆投下後の人々や、被爆者の遺品などがたくさん置かれてある。高校生の時より、ダイレクトに戦争はダメということが、心に伝わってきて、終始心が苦しかった。平和記念公園は、実際に原爆が落とされた当時、生活していたボランティアの方に案内していただいた。その方のお話は今では想像できない話ばかりで、悲しい話が多かった。

そこで考えたのが、戦争や原爆をどう後世に伝えていくかだ。実際に原爆を体験している人は、時間が過ぎればみんな亡くなってしまう。そこから私たちはどうしていけばいいのか。「多様なたくさんの被爆者たちの原爆体験を、あなたやわたしがたった一人で理解しよう、継承しよう」と抱え込むのは無理です」本当に広島を訪れてそう思った。様々な表現を通じて、原爆の悲惨さ、同じあやまちを絶対におかしてはならないという気持ちが、心に伝わってくるのだ。それだから小学生が、平和教育の一環でたくさん来るのだと納得し、小学生に限らず、世界の人々が平和の共通した解釈をもつためには、広島を実際に訪れるのが一番だと確信した。また、広島研修の中で、呉市のでつのかじら館に行くと、戦争を体験した方々のインタビューを上映していた。ビデオカメラを活用する見せ方、伝え方が素晴らしいと思った。また、非体験者から非体験者へ戦争の記憶を継承するため、広島市が被爆体験伝承者養成事業というのを行っている。3年程度で、被爆体験伝承者として活動できるという。現在は131人が活動中だという。

平和教育について

私は、小学生の時、平和教育を受けて、いつも感想に「戦争はダメだと思いました。平和の

大切さがわかりました」とだけ書いていて、ほかに言葉が見つからなかった。そして外国ばかりが悪いとだけ考えていた。「平和教育は 1990 年代移行、停滞している（ように思われる）」「平和教育はマニュアル化され、子どもたちは最初から知っていることを結論として述べるに過ぎなかった」やはり平和教育の現状と課題はこのように考えられるようだ。この課題に対しては、もっと子供たちに自分なりに考えさせるために課題を与えて調べさせたり、様々な考えをグループワークで共有したりするなどすれば、新しい発見ができると思う。例えば、どうしたら平和を維持できるか、今の日本は平和なのか否かなど、子供が考えた方が柔軟な発想でいい意見が出るかもしれない。「イギリスでは児童生徒に教え込みをすることを避けようとするし、その代わりに平和問題の対立する見方を提示して、問題を自分たち自身で客観的に考えることを手助けしようさせようとしているからである」このように子供たちの思考の多様性を手助けするのも一つの方法である。平和教育によって、「歴史的に考え、批判的に検討し、政治的に判断できる若者」が育ってくれたらいいと思うし、自分も常に自分の思考をもって政治に参加したいと思った。

おわりに

実際に広島研修に行くことで、新たな視点を得ることができたし、一緒に行った友達の考えも知ることができた。一番効率のよい学びの方法だとも思った。その地の興味関心がでてくるので、深い学びができるのではないかな。

世界遺産に登録されているということは、それだけそこで学べることが多いということではないだろうか。広島には二つも世界遺産に登録されているところがあるし、修学旅行の生徒数も増えているそうだ。原爆ドームは負の遺産として残されている理由が展示物を通してわかった。自分のこれまでの原爆の知識や、戦争への姿勢は、なんとなくでしかなかったが、今回正しい知識を得ながら、実際の建物や雰囲気味わうことで、自分の中での平和意識や、平和に対してこれから考えなければならないことが、わかってきた気がする。

[参考文献]

- ・ドゥースルリ・ファン・デル「参加型継承のための原爆体験・記憶分析」、*IPSHU Research Report Series*、33、2018 年。
- ・寺岡聖豪「『原爆を語る』と平和教育」『福岡教育大学紀要』、第 4 分冊第 66 号、2017 年。
- ・石井眞治、山崎茜、杉田郁代、森川敦子「広島市平和教育プログラムに対する小学校教諭志望大学生及び幼稚園教諭志望大学生の認知」『比治山大学紀要』第 22 号、2015 年。
- ・藤原幸男「戦後 70 年と平和教育—戦後教育実践と教育方法学 (1)」『教育方法学研究』第 41 号、2016 年。

広島に行き思ったこと・感じたこと、演習を振り返って

1 部日本文化学科 2 年 2718153 澁谷 康晴

まず、初めに私がなぜこの集中講義をとろうと思ったかということ、人文学部でしかとれない講義であり、まだ広島には行ったことがなかったので、どのようなところか知りたかったからである。さらに歴史に興味があり、私は世界遺産検定 2 級を持っているが、次の級に挑戦するために広島には世界遺産が 2 つもあるので、実際に訪れて触れることで何かしらの知識になり、世界遺産の見方・価値を知ることにより余裕や教養を持って臨めると思ったからである。

私が個人で調べたのは厳島であるが、その前に他に訪れたところについても言及したい。まず、大久野島である。到着して真っ先に感じたのは本州との時間の流れ方の違いである。私が今まで訪れたことのある島とは違い、大久野島にしる宮島にしる瀬戸内海特有のゆったりとした心地がした。老後には最適である。さて本題だが、事前学習では戦争中毒ガスが作られた島であると学んだ。実際行ってみると当時の面影はあまり感じられなかったが、資料館はしっかりしており、毒ガスの悲惨さを知ることができた。

つぎに、呉である。ここの見学場所は主に 2 つで、大和ミュージアム周辺と入船山記念館である。大和ミュージアム周辺はやはり戦争の時使われた戦艦や潜水艦などについて展示されていて、ここにおいても戦争の悲惨さを痛感した。意外にも戦艦大和は戦争に使われておらず、普段映画や漫画では見えても知らないことがたくさんあることに気づいた。入船山記念館は港のほうとは打って変わって自然の多い山で、特に旧呉鎮守府司令長官官舎は、和と洋が混ざった豪壮な内装で来客者が多かったことがうかがい知れ、当時の日本人の家とは格差があったように思われる。また、入船山記念館に行く途中自衛隊の敷地があり、いまだに海上の重要都市としての性格が薄れず、住民はどう思っているのか気になった。

つぎに、広島原爆ドーム周辺である。原爆ドーム自体は思っていたよりも小さく、あまり人も集まっていなかったのが意外だったが、それでもいままで倒れずに残っていることに感心し、原爆が真上から落ちたから残っているということも知り、世界遺産としてしっかり保護されていると感じた。ガイドさんの話を聞き、実際に当時のことを体験している人の話にはとても重みを感じた。思っていたより小・中学生が多く、学びに来ている人が多いと感じ、後世にこうして原爆の悲惨さを残していければ良いと思った。ただ、特に原爆資料館などあまりにも人が多すぎるので、少し入場者を制限する必要があると思った。

次に、最終日の岩国である。私は錦帯橋単体があるだけかなと思っていたが、岩国城や周りの建物・景観が一体となっている。錦帯橋が通行料をとるのは疑問だったが、それは錦帯橋の遺産度、昔は武家の町に渡るのが大変だったことを考えれば納得できる。

また、厳島神社の大鳥居について調査しようとしていたが、ちょうど改修中ということで県立広島大学において開催されていた厳島大鳥居の企画展に行った。県立広島大学には「宮島学センター」という宮島を専門に調査している組織があり、大学生が施設内で行うにはかなり大

規模で詳細な調査・展示がされており、同じ大学生として感心した。展示の中でも印象的だったのが、「現在の課題」である。鳥居に用いられる木材が取りにくくなったことで、後世にどう残していくか、鳥居がなくなっても他に表現方法があるのではないかなど、考えさせられることが多かった。また、実際に宮島に行き感じたのが、これだけ歴史があるのに鳥居だけの情報が明らかに乏しい。これはそれだけ昔からシークレットの場所として存在していたことを意味している。ただし、県立広島大学が宮島内ではなく少し離れたところにあるのは不便かなと感じた。宮島は世界文化遺産だが、日本三景の面も併せ持ち自然遺産としても価値も高く、他の世界遺産とはまた違う価値も多いと感じた。

今回このように広島をまわって、厳島を除けば戦争に関係する場所が多く、日本にしか存在しない「負の遺産」としての後世へのあり方を学ぶことができた。大陸に近く、軍事基地として発展していた地域は日本の北にすんでいる私にとって馴染みがなく、だからこそ学び理解することが多かった。厳島では少ないながら子供が百人ほど住んでいるが、こうした世代に日本の文化を伝えていくためには、資料の保存に重点を置くとともに、進歩していく AI 技術によってだけでなく、口から口への伝承も重要であると思った。

広島県の歴史について

2部日本文化学科 1年 2819121 小林 和広

目的

この度、私が文化遺産特別演習において広島に行かせていただいた際に、広島県の歴史について調べたこと、自分が感じたことや考えたことに重点をおいて説明する。

題材にした理由

元々私は日本や海外の歴史が好きであり、今回の文化遺産特別演習に参加した主な理由も広島県の歴史や文化について実際に行くことで今までとは違った考え方や感じ方ができると思ったからである。そして、今回得ることができた知識、考えについてレポートとして書きたいと思う。

広島城について

築城

広島城は、1589年に中国地方の大半を占める戦国大名となった、毛利元就の孫である毛利輝元が城下町と一体化して政治・経済の中心地として機能する城郭の必要性を感じ、築城を穂田元清・二宮就辰に命じた。

城下の整備

その後、1600年に関ヶ原の戦いが起き、毛利輝元に代わり、福島正則が入城し、外堀や外郭の整備を進め広島城を完成させた。また、広島城下を通るように西国街道（山陽道）を南下させ、その沿道を中心に町人町の大幅な拡充を図った。しかし、洪水で破損した広島城の修築許可の不備をとがめられた正則は1619年に領地を没収され、代わって和歌山から浅野長晟が領主として広島城に入城した。以後、1869年の版籍奉還まで浅野氏が広島城主を勤めた。

明治以降

廃藩置県以後、城内には旧陸軍の施設が徐々に設けられ、建造物は次第になくなり、特に1874年には、本丸・三の丸で出火し、本丸御殿等も消失し、大天守、中・裏御門、二の丸等を残すのみとなってしまった。そして、1945年8月6日、原子爆弾により天守閣をはじめ城内の建造物はすべて壊滅した。現在の天守閣は、1958年に外観を復元して建造されたもので、内部は武家文化を中心に紹介する歴史博物館になっている。

呉について

呉の歴史

1889年に呉鎮守府、1903年には呉海軍工場が設置され、戦前は船艦「大和」を建造した東洋一の軍港、日本一の海軍工場の街として栄えた。戦後には、戦前から培われた技術が新しい技術と結びつき、世界最大のタンカーを数多く建造する有数の臨海工業都市として発展した。

海軍整備の時代

ペリー艦隊来航をきっかけに、200年以上続いた徳川幕府による鎖国政策は終わった。西欧列強の著しく発達した造船技術を目にした日本は、強い危機感を抱き、西洋型の進んだ船の建造・運用技術を導入するため海軍を創り、その拠点として鎮守府を国内4カ所に設置した。

技術習得の時代

建造の国産化のために呉海軍工場が設置され、呉の街は日本一の技術を支える工員や水兵で賑わった。

呉と太平洋戦争

太平洋戦争が始まると、日本の艦艇の建造・修理を担う呉海軍工場の役割はますます大きくなり、繁忙を極めるようになる。戦局の悪化とともに、食糧不足に悩まされるようになるなど、一般市民の生活は戦争一色になる。日本最大の海軍工場があった呉は、アメリカ軍の空襲の標的となり、14回にも及ぶ空襲を受け、内6回は特に激しいものとなった。

呉と原爆

広島に原子爆弾が投下され、呉からもキノコ雲が確認された。呉からは救援隊や調査団が派遣され、調査団は日本で最初に原子爆弾の存在を確認した。

平和産業湾都市としての再生

空襲等により荒廃した呉市は、戦後、平和産業湾都市としての復興をめざし、世界的な造船の街として名をはせ、科学、技術、製造、文化など多方面での発展を見た。

以上を踏まえて

広島城は、築城後に城主を変え明治維新を迎えると近代の軍隊の駐屯地となり、広島に原子爆弾が落とされる一因になってしまった。そして、その原子爆弾が広島城を全壊させたという事実には、何か歴史の因果関係があるように思えてきた。

また、日本の呉市という町が戦前において大きな意味を持ち、海軍の心臓とも呼べる町だったことを知る人は意外と知られていない事実だと思う。呉市は空襲が激しく、広島には原爆が落とされ、広島県が戦後に与えた衝撃が大きいことが改めてわかった。

最後に

今回の文化遺産特別演習では、自分たちが戦争というものを教科書の一文でしか認識していなかったことを、わからせてもらい、私たちの様に、戦争の悲惨さを理解していない人たちに、次は私たちが伝えていく番だと思った。広島文化・歴史を実際に目で見ることで、自分の足で歩くことが大事だと思い、まだ行ったことのない日本の歴史を感じられる場所に行ってみたくて改めて強く感じた。

巖島の世界遺産としての取り組み、その自然について

2部日本文化学科 1年 2819126 清水 理紗子

1. 調査目標

今回、自分はこの実習で、宮島について主に世界遺産関連のことや歴史的なものから調査をしていこうという方針で向かった。だが、実際に宮島に赴き現地ガイドの方の話や自分で島を周ってみると、この島は島全体が遺跡であると同時に生きていて、私達と同じ時間が流れているのだと感じた。この所感を元に実習後は目的を変えて、遺産、遺跡を見る視点ではなく、もっと現実的に身近に、島の植生など自然と今まで行われてきた保全保護活動・観光地としての取り組みの、2つに絞って調べることにした。

2. 弥山を含む島全体の自然・その希少性

まず、巖島自体が花崗岩である。瀬戸内海の島の多くは花崗岩である為それ自体は珍しくはない。花崗岩は風化しやすい性質である。そして、規則的な割れ目（節理）ができる。弥山で見られる色々な形の岩はこの節理によるものである。巖島はその花崗岩の節理で出来た地形が遠くから見ると観音様の寝姿に見える、という点で島自体が信仰対象になる所以であるといえる。

そして、弥山の植生で特筆すべき点としてその希少性が挙げられる。なかでも稀なのは寒冷地で育つモミと比較的温暖な気候で育つミミズバイが混生していることである。他にも宮島原生林の特徴として、稀少種が多く見られること、普通種であっても人の介入がなく自然の状態で生育していること、本土の人里や路傍の植生を構成する植物が少ないこと（例、アベマキやコナラ、イヌツゲ、ノグルミ、ナツハゼ、ネザサ、キンミズヒキ、スズメノテッポウ、チヂミザサ、ノアザミなどが見られない）、ニホンジカの影響を受けた植物相であること（イネ科やカヤツリグサ科などの草本が少なく、アセビ、ハスノハカズラ、レモンエゴマなどの有毒植物や強い臭いを持つ植物や、カンコノキやハウロクイチゴなどの棘をもった植物や堅い葉を持つ植物が多い）、など多くある。

そして宮島は広島県で見られる維管束植物の約1/3の種を見ることができる（およそ700種）。この数は、瀬戸内海の島の植物相としては非常に多い種数である。他の島とも植生や植物相が違うのは少なくとも7世紀以後から神の島として島が保護され長い間人の影響をほとんど受けなかったことが理由だとされる。

3. 世界遺産を維持していく為の取り組み

建物自体の維持のため巖島神社は常にどこか一部が修繕されており、2012年には台風被害に遭った弥山の登山道の途中にある仁王門が、翌年には弥山展望台が新しく作られた。

そしてコンビニや信号機、農地を作らない等、自然に対して手を加えず人工物を出来る限り島に置かないよう規制されている。全島が神聖であるから産婦人科も建てられない。こうした

幾つもの制約があるが、それが何百年も大切にされ、本土との連携により人が住める環境であり続けている。

宮島に限らず島にとって一番の災害は台風である。特に厳島神社は海辺に建てられているので必然と自然災害への対策をしなければいけない。その一つの例として、神社の床板はわざと隙間をあけ崩壊するのを防いでいる。

このように災害に対して真っ向から立ち向かうのではなく、ある程度の損失を認めて受け流していくような対策がとられている。そういった対策により、これまで数えきれない程の台風に見舞われたが、神社が壊滅状態の損害を負うことはなかった。平清盛が厳島神社建設当初に強い風が吹かない比較的穏やかな位置に計算して神社を建てたことも、現在まで活かされている。神社以外にも、弥山を流れる紅葉谷川では砂防工事がされている。これは台風で起きた土砂崩れの際に行われたもので、景観の保護などを理由としてダムはコンクリートではなく石で作られている。

4. おわりに

弥山を含む宮島は、それを構成する石に神秘さがある。瀬戸内海の島は多くが花崗岩ではあるが、節理がきれいに残った状態で今もある、というのが他の島とは違い世界遺産であることの理由の一つでもある。宮島は厳島神社に目がいってしまうが、その後ろにある弥山も、海も世界遺産の一部であり長い年月をかけて生み出され守られてきた貴重なものである。

自然は一度失えば元に戻すまで途方もない時間を費やしてしまう。弥山の貴重な自然が突然失われてしまうことも、実際に火災が起きたように当然有り得ないことではない。今続いている維持・保護の取り組みと同時に観光地と自然との釣り合いや未曾有の災害への対策と復帰方法など、私の頭では思いつかないような課題が幾つもあるのだろう。

観光地や歴史のある貴重なものを保護していくのは、大変な労力と多くの人の協力があってこそで、特に世界遺産である場合はより一層尽力しなければいけない。このような努力のおかげで、現在私達が自分の目で何百年前と同じ様な景色を見ることが出来ているのだと、強く実感した。

個人的に、シカとの共存においては、シカが増えすぎた場合人間側の被害が多いのではないかと考える。北海道ではエゾシカの数が増大したために、山に行けば低木の葉は無くなっており、金網で守られた範囲内でしか本来の植生がみられない状況にある。シカと人が同じ場所で生活している所ではシカの数の管理はどのようにされているのか、というところが気になった。他にも実習ではあまり時間をかけて調べるのが難しかったので、機会があればまた訪れたいと思う。

世界遺産に対してこんなにも興味をもって接したことは初めてのことだったが、自分が関心を向けて少しでも調べてから現地に向かうことは幾つもの発見と出会える貴重なものだと思えることが出来た。視野を広げて前提を外して物事を見ることを体感できたのはすばらしい経験で、これから様々なことに応用していこうと思う。

広島研修報告書

2部日本文化学科 2年 2818138 宮島 睦貴

私は、『現地でなければ聞けない声を聴く』をテーマに、今回の特別演習に参加した。

空港に着いてすぐ、貸し切りバスに乗り替えた。そのバスの運転手さんはとても気さくな方で、バスに乗車中、初めて広島を訪れた私が肩の力を抜いていられたのもこの運転手さんの配慮が行き届いた丁寧なガイドがあったからだと思う。私が持っていた関西の方のイメージとほとんど変わらず、ほとんど話したことのない人たちの中にも、移動中はリラックスしていられた。

初日と2日目は大久野島に行った。今回の研修に参加するまで、私は大久野島という名前を知らなかった。事前学習で調べた際には、この島は戦時中秘密裏に毒ガス製造を行っていた島で、当時日本地図からは消されていた。その大久野島ではどのような話を聞けるのかと考えながら臨んだが、現地では戦争に関する話は一切されず、レジャー関連など現在の島の状況についての話を多く聞いた。この島は別名うさぎ島と呼ばれ、700羽以上のうさぎが生息している。したがって、歩くたびにうさぎが寄ってくるといった、普通では考えられない島だが、そのうさぎたちももとは毒ガス実験に使われるために連れてこられているので、一概にかわいいねとは言っていない。

一方で、毒ガス資料館では戦時中秘密裏に行われていた毒ガス製造についての資料やビデオなどが展示されていました。私が所属していたグループはこの資料館について調査したが、撮影禁止とあるとおり、普通には見ていられないような悲惨な内容のものも資料の中にはあった。当時の状況を受け止めて、現在と未来を考える。この資料館はそういった点で特に重要な役割を果たすだろうと感じた。

3日目は、大和ミュージアムにてガイドさんの話を聞いた後、自由行動となった。私は、戦艦大和が作られていた造船所や、日本で唯一、現役の戦艦が見られる海上自衛隊の基地の近くまで行った。造船所は今でも使われていて、1つ1つのスケールの大きさに圧倒された。海上自衛隊基地付近では戦艦や潜水艦を見ることができ、こんなにも近くで見られるのかと、驚きを隠せなかった。一方で、大和の偉大さを声たかだかに話す食事処の店員さんなど、戦時中から変わらず活気にあふれている様子に、ある意味で違和感を覚えた。

造船所や海上自衛隊基地が、戦時中の活気をそのまま残している場所であれば、4日目に行った原爆資料館や原爆ドームは、戦時中の活気を一切断ち切った場所であると言える。資料館に保存されている写真や物品には、目をそらしたくなるほどに酷い様子が現れていた。1つ1つに当時の時間が刻み込まれていて、そこから当時の生活が読み取れる反面、基本的に今とは変わらぬ生活を送っていた人々がどんなにつらい目にあっただかを感じとることができた。ここでもガイドさんの話を聞くことができた。ガイドさん自身も被爆されたということで、とても貴重なお話を多数聞くことができた。その中で、特に私の中で印象に残ったお話がある。

それは、毎年8月6日に行われる平和記念式典にて首相等を招く際に、資料館の方々が対応されるのだが、それにあたって年々敬語についての意識が厳しくなっているというものだった。「本来は広島、そして日本の平和を願う式典のはずなのに、これではだれのための式典なのかかわからない」というガイドさんのお話に対し、その通りだと思うとともに、本当の意味で国が人々により添えていない状況を改めて実感した。やはりこれについては、国の根本から変える必要があると思う。形だけの訪問、接待を受けたいがための視察、これに何の意味があるのだろうか。国の上官を迎えるにあたって担当の機関はかなりの時間と人員を割いて準備を行う。そもそもそれについても疑問の余地はあるが、私としてはまず、今一度誰のための政治なのか、だれのための式典なのかを私たちだけでなく、政治担当者本人たちにも考えてほしいと思う。そう言った意味でも、ただテレビを見ているだけではわからなかったことを多く知ることができた1日だった。

その後、一人で電車に乗って、広島の各地をまわってみた。それまでに見てきた資料館の写真の様子とは違い、家が所狭しと並んだ住宅街が見えた。札幌と違い、瓦屋根の家が多く、学校1つ1つも小さい。細道を上がっていくと、猫たちと戯れている人たちもいた。人口密度はもちろん高いのだろうが、それとは別にいい意味で、札幌に比べて人々の熱さを感じた。同じバッグを持ったおそらく私立学校の生徒たちが電車を待っている様子も見た。札幌では見慣れない光景にたくさん出会えたと思う。神社もたくさんあった。

5日目は、神聖な島である宮島に行った。話には聞いていたが、潮の満ち引きが見られ、島についてからおよそ3時間後には満潮になった。神社が水の上に飛び出しているような印象を受けた。回廊にある1つ1つの柱や板の造りがとても美しく、能の舞台もあり、神社と神社にまつわる行事が長年ともにあるように見えた。

宝物庫では見たことのない宝物や資料を多く見ることができた。その中で特に気になったのは三十六歌仙の絵で、小野小町、源重之、藤原葛光、斎宮女御など6人の絵が飾られていた。それら1つ1つに歌が書かれていて、もうすでに読みにくくなっているものもあったが、やはり教科書で見るとでは格段に印象が変わるなと思った。

多くのお寺や神社がある宮島は文字通り荘厳だった。神聖であるがゆえに、現代の最先端技術はあまり見られず、そのおかげで島全体が自然のままに保全されている、そんな印象を受けた。

今回の研修を経て、ここには書ききれなかった様々なお話を聞くことができた。それをふまえて、私は、今回訪問した大久野島の毒ガス資料館や広島原爆資料館のあるべき姿について考えた。この資料館で取り扱っている資料は、当時の状況を見る人に伝えられるとても貴重なものである。私が感じたこととは別に多くの人々がそれぞれ違った感じ方をするとと思う。私はその違いにこそ、これからを考えるうえで重要なヒントがあると思う。みんなで意見を出し合って、自分たちの未来を考えていく参加型の社会。それこそが急速な技術発展の中で人々に求められる姿勢なのではないかと思う。そのためにも上記の資料館は、資料の展示をする場所であると同時に意見交換の場所であれば、自分たちの将来を考えていくという点でとても効果的な場所になるのではないかと考えた。

私自身まだまだ知らないことがたくさんあると実感したこの6日間は、もっと北海道を出ていろいろなものを見てみようと考えさせられる期間でもあった。この貴重な体験を大事にするとともに、今後の自身のものの見方の基盤として活かしていこうと思う。

負の遺産から戦争の悲劇を見る

2部日本文化学科 3年 2817128 菅原 繁

はじめに

私は太平洋戦争敗戦後の混乱期に生まれた団塊世代である。高齢を迎えた私にとって、参加者の皆さんと一緒に見学や学習ができるのか不安であったが、天候にも恵まれ体力も消耗せず全行程を無事終了できたことは最高の喜びと思っている。私が子どもの時には町には国立療養所があり、傷痍軍人が多数入院していた。戦闘帽に白衣（病院服）をまとい松葉杖をつきお祭会場の片隅や店先に出没し胸に戦争で負傷者した経緯を書いたプラカードを掲げ物乞いをする、無言で人の姿を見詰めている姿が印象的であった。軍人恩給制度はGHQの「非軍事化政策」の一環として1946年2月に停止されたが、1953年に復活したのを後で知った。NHKラジオでは舞鶴港に入港する船と帰還兵の名前を連呼し、親戚・友人・知人に宛てた伝言を読み上げるアナウンサーの声が今でも耳の奥に残っている。これが私の戦争体験である。特別、戦争について考えた事もなかった。しかし、この度の研修旅行は改めて広島地域における戦争の悲惨さと自身の過去を考えさせられるきっかけとなった。

研修2日目 毒ガスの大久野島

大久野島は緑豊かで周囲は4.3km（外周路3km）、1時間30分程度で散策できる小島である。徒歩で回ると毒ガス貯蔵庫跡・砲台跡・火薬庫跡・発電所跡・研究室跡・毒ガス製造の跡地などが次々と目に飛び込んでくる。一方で至る所に野うさぎが沢山いて、のどかな雰囲気醸し出している。毒ガス資料館では毒ガスの種類や人体に及ぼす影響が示されていた。毒ガス製造の工員の体はゴム製の防毒マスク・衣類・手袋・長靴等で完全に覆われていても、イペリットガスはその隙間から浸透し、皮膚、目、咽などをおかし結膜炎、肋膜炎、肺炎、気管支炎などを引き起こした。完全防護スタイルの人形は恐怖を訴えている様に見えた。島は毒ガス工場から排出される排気や焼却場から出る煙で覆われており、あらゆるところでひどい臭いがしていた。直接毒物に触れる機会のない事務職、守衛、医療機関者の中にも健康を害する人々が出てきた。1938年（昭和13）年の「国家総動員法」や翌年の「国民徴用令」により、国民は「青紙」一枚で強制的に徴用され軍事産業などに従事させられた。最盛期には5,000～6,000人の人達が作業に従事していたのである。終戦後に毒ガス被害者の現状把握は昭和27年健康診断から始まり昭和56年までに登録された旧従業員の生存者は4,253名、死亡者は996名で合計5,219名であった。疾患別死因では悪性腫瘍・脳血管障害・慢性気管支炎・自殺・肺気腫・肺結核・肺炎・肝硬変の順で死亡している。毒ガスにより皮膚がただれ、咳き込んでいる患者の姿を写真で見ると胸が痛くなる思いがした。

研修 3 日目 大和ミュージアム

戦艦「大和」は、昭和 16 (1941) 年 12 月、呉海軍工廠 (海軍直轄の工場) で、当時の最先端技術の集大成でありながら極秘裏に建造された世界最大の戦艦である。しかし昭和 20 (1945) 年 4 月 7 日、沖縄特攻作戦に向かう途上、大和の出撃は直ちに米軍に察知され、九州沖を航行中に米艦載機 386 機と潜水艦による波状攻撃を受け、午後 2 時 23 分、鹿児島県坊ノ岬沖 160km の地点で大爆発を起こして乗員 3,332 名のうち 3,056 名が大和と運命を共にし、430 メートルの海底深く沈没した。戦艦大和は建造された時から悲運を背負っていた。日本が戦艦を使わずに空母からの艦載機による爆撃だけでハワイの真珠湾で米・太平洋艦隊に大打撃を与えるなど大戦果を収めたことにより、戦艦のような巨艦を主体として艦砲攻撃による戦略よりも、空母を主体として艦載機からの空爆による戦略の方が効果的であることが実証されていた。その 8 日後に戦艦大和が進水したのである。その時点で悲しいことに戦艦大和の役割は終わっており、山本連合艦隊司令長官などは大和建造中止を進言したものの受け入れられなかったと言われている。米国は真珠湾で一部の戦艦を失ったが、空母建造に注力することができ、空母主体の機動艦隊を編成して、ミッドウェー、レイテの海戦で大勝利を収めたのである。終戦後は戦艦「大和」建造の技術は生き続け、世界一の大型タンカー建造だけにとどまらず、自動車や家電品などで戦後の日本の復興を支えてきた。全長 26.3 メートルもある 10 分の 1 戦艦「大和」は、大和ミュージアムのシンボルとして平和の大切さと科学技術のすばらしさを後世に語り継いでいる。ボランティア説明員は銅板に書かれた戦艦「大和」戦死者 (沖縄特攻作戦) 名簿を指差し、あるとき見学者の説明が終わると老女の方が近寄って来られ、これが私のお父さんと告げられたことが忘れられないと述懐されていた。戦争のむごさを身近に感じた。

研修 4 日目 広島平和記念資料館・平和記念公園 (原爆ドーム、世界文化遺産)

ヒロシマピースボランティアによる説明を聞くことができた。彼も原爆被害者の一人であり、爆心地から 3.5km 離れた住まいで被爆した。現在も積極的に被爆体験伝承者として学習に来られる人たちに公園内施設・資料館の展示物説明に当たっている。

当時 4 歳の彼は、1945 年 8 月 6 日 8 時 15 分、ピカドンとなる火の玉を見る。当時アメリカ軍の空爆において焼夷弾で東京・名古屋・大阪の大都市を焼き尽くす戦略を実行し、東京では一夜にして 10 万人の死傷者が出た。ここ広島でも同様に空爆が起きるとの考えから、「国家総動員法」により旧制中学性・高等女学校生の学生 6,300 人が動員され、焼夷弾による建物の延焼を食い止める目的で建物を取壊し幅 100m の空地を作る作業に従事中、突然頭上に原子爆弾が炸裂し一瞬に殆どの方が死亡した。グアム島から飛び立った B29 の 4 機は、気象観測機、4 トンの原爆を搭載したエノラ・ゲイ機、大気や放射能観測 (ラジオゾンデ) 機、被爆による建物破壊程度をカメラに収める機であった。アメリカはこれ以上の犠牲者を出さずに戦争を早く終わらせる為、また原子爆弾の破壊力を実際に見たかったなどの理由で、上空 1 万メートルで飛行していた B29 はリトルボーイを投下した。43 秒後には上空 600m で爆弾は炸裂、3 ~ 4,000°C (太陽表面 6,000°C 鉄 1,500°C) の熱と爆風を巻き起こし黒い雲を発

生させた。広島は一瞬で焼け野原となり 35 万の人口の内 14 万人が死亡した。生き残った人たちは大やけどを負い、皮膚が焼け落ち真っ赤な肉が現れた人々が幽霊のようにさまよう姿はこの世の者とは思えないほど残忍である。資料館では水を求めて川の中に入り力尽き死体が埋め尽くす様子や、防火水槽などに折り重なるように死亡している絵が展示されており、悲惨さを新たに示した。

研修 5 日目 厳島神社（文化遺産・自然遺産）

神社の社殿が海にせり出すように築かれたのは、「神をいつきまつる島」として崇められていた神聖な土地に建てるのを避けたためだと伝えられている。鎌倉時代からは宮島全体が神社地として保護され、農耕が禁じられてきたことから、当時のままの姿で保存されてきた。

創建は推古元年（593 年）、その後、仁安 3 年（1168 年）、平清盛によって寝殿造り様式（平安時代貴族の邸宅建築様式）を取り入れ現存の規模に造営された。厳島神社の背後にそびえる弥山は神体山であるため、手つかずの原始林が残っている。山頂付近には弘法大師が開いたという弥山本堂（求聞持塔）、霊火堂などが建立されている。現在は自由に見学できる。大鳥居は修理中であり厳肅な姿は見ることはできなかった。厳島神社の中で結婚式を執り行われていたこと、寺や神社が多数散在していること、狭い一角に昭和時代にタイムスリップした様な温泉観光地にありがちな土産商店街があること、世界遺産であるが故の外国人観光客の多さなどに驚いた。

研修 6 日目 錦帯橋

岩国市の錦川に架けられた橋。5 個の反り橋からなる木造橋で、日本三奇橋の一つとして知られ、国の名勝にも指定されている。当初は京都の渡月橋のような橋脚と橋桁を備えていたが大水が出るとその度に流されたため一計を案じ、1673 年岩国藩主吉川広嘉の代で、中国の西湖遊覧志の六橋にヒントを得て創案された。橋の長さは橋面に沿って 210 メートル、幅 5 メートル、橋台の高さ 5 メートルで、木材を組み合わせ、巻き金とかすがいのほか 1 本の釘も使わず力学的にも優れた構造をもつ美しい橋である。武家屋敷のある横山と城下町の錦見を結ぶ城門橋であった。いくたびかの修築を経て、創建当時の姿を保っていたが、1950 年（昭和 25）のキジア台風の大洪水で流失、現在の橋は 1953 年に再建された橋を架け替えたもので、2004 年（平成 16）完成した。錦帯橋の美しさは、江戸時代中期以降からすでに評判になっており、歌川広重や葛飾北斎、司馬江漢など多くの有名な絵師によって描かれている。現在も地元の子供たちが通学し、お年寄りが買い物をするために渡る大切な生活道となっている。約 340 年の長きにわたり地元岩国の人々の手で護り伝えられている錦帯橋は、人類共通の遺産である世界遺産登録を目指して活動している。

おわりに

中国地方は古くから開け、朝鮮半島から伝来した製鉄の技術で日本刀の製作が始められた。その卓越された鉄の活用術を生かし、明治期に入ると広島地域では良港を生かした誘致運動

を起し軍港色を強め、一大軍需産業の基地となり戦艦・潜水艦などが数多く作られた。今現在その技術力は自動車や家電品の生産など幅広い分野で応用されるまでに至っている。私の愛車はマツダであり、誇りを持ってこれから先も乗り続けたいと思っている。

[参考文献]

行武正刀『一人ひとりの大久野島』 ドメス出版、2012年

樋口健二『毒ガスの島』 こぶし書房、2015年

令和元年度 文化遺産特別演習報告書 第1号

発行日 令和2(2020)年1月20日

発行 北海学園大学人文学部

印刷 株式会社アイワード

文化を学ぶ 世界と繋がる



北海学園大学人文学部

日本文化学科(1部・2部)／英米文化学科(1部・2部)

〒062-8605 札幌市豊平区旭町4丁目1番40号

TEL.011-841-1161(代表) FAX.011-824-7729

URL <http://human.hgu.jp/>